

## 保育の第一歩

山下 徳治

英語の原<sup>プリンシプル</sup>理<sup>ミ</sup>いふ言葉は、ギリシア語の第一歩<sup>アルヘ</sup>いふ語源から變化、轉用せられた言はれてゐる。アルヘーは私共が何處かへ出掛ける場合に踏み出す第一歩のこゝを意味してゐる、それは私共が日常經驗において何時でも亦幾回さなく出會ふ、文字通りの意味の第一歩のこゝである。私はそのこゝを最初にはつきりさせておきたいから繰り返しこゝに言つておく。古い時代のプラトーンやアリストテレスからデカルト、カント、ヘーゲルを経て現代のベルグソンやフッサールに至る哲學は、すべてさきの原理についていろいろに解釋した學問のこゝを言つてゐるに過ぎない。そのこゝから考へる「保育の第一歩」は保育の原理または保育の哲學と言つてもよささうである。然しこゝではこゝまでも、さきに述べたこゝろの文字通りの意味で「保育の第一歩」としての重要な問題について考へて行きたいと思ふ。なぜか言へば、現在の吾々の生活はさきに述べたやうな哲學なしに營まれてゐるからである。哲學のない人間の生活は、無軌道で進歩の不確かな、極めて不安で危険な生活であるには違ひない。それにも拘はらず吾々が哲學なしで生活してゐるのは、哲學が、吾々の日常生活の經驗から得た常識の眞の欲求や指導に役立たなくなつてゐるこゝが最大の原因である。社會は産業的にも、政治的にも、科學的にも進歩して來た。然るに哲學のみは依然アリストテレス哲學の新しい解釋や註解を益々繊細、微妙な仕方でも繰り返してゐるに過ぎないと言つても誤りではないと思ふ。それがよいか悪いかは知らないが、吾々の現實の生活は

さきの産業的、政治的、科學的推移は切つても切れない關係で結ばれてゐるので、傳統的な哲學は吾々の生活から愈々遊離して、生活を指導するこゝが最早や出来なくなつて滅びていくより外に路はないであらう。詳しい歴史的な事實からの抗議を抜きにして、たゞその結論だけを述べてゐるので實に口はばたいこゝを言つてゐるやうに聞えるかも知れないが、傳統的な哲學の維持者達の中で、時代を忠實に生きようゝ意志する人々の間からも既に哲學の改造は叫ばれ、新しい哲學が生れようゝしてゐる。たゞそれが非常に困難なのは、新しい時代の知識が古い傳統の知識を純化したものには違ひないが、その純化は過去のを過去のものを過去のものゝしてではなく、現在の生活内容を豊富にするための純化である限り、現代の精神がたゞへ不確實ながらも蓋然的に分つてゐなければならぬ。こゝろが時代の精神が分るこゝは、何か特別の専門的知識からではなく、その時代に生きてゐる多くの人々の日常生活の經驗の中に、漸次に自然に養はれた常識こそ身を以て時代の精神を體驗してゐるのである。傳統的哲學やまた現在哲學の改造の必要を發見してゐる人々も、かゝる常識を哲學研究の對象にするこゝを欲しないため、またはそれに氣付いてゐないために、哲學の改造は非常に困難な路を辿つてゐる。常識の整頓されたものが哲學であり、さうした哲學でなければ、それは吾々にこゝつては無關係なもの、吾々の生活をよりよく變化させて、絶えず進歩させてくれる指導的意義——そこに哲學の任務がある——を失つて終ふ。生活のあるこゝろには必ず日常の經驗から生れた一聯の常識があり、その常識も現代のやうに通信、交通機關や、ラヂオや映畫等の文化的施設の發達した時代に當つては、即ち國際的な交渉が頻繁に行はれてゐるやうな時代には、相互的な影響を強力に受け合つてゐるので、單に國際的に廣汎な常識となつてゐるこゝいふだけでなく、相互の理解、相互の發展、ひつくるめて言へば、眞の意味における社會的、發展のため重要性が増大してゐるのである。

然し最も重大なこゝで吾々自身の中に集喰つてゐる根本の考へ方から先づ替へて行かなければならぬこゝは、哲學

か、理論とか、また一般に思想とか言はれてゐるものは、それ自體が何も價值のあるものではなく、それらは生活經驗そのものから、生活の障碍を乗り越えるために、生活の陥り易い弊を矯めるために、生活を新しい環境に適應させるために生れて來たもので、謂はゞ生活を作り上げて行くための道具にしか過ぎない。吾々は理論を道具にして生活を築いていくのであるが、それは絶えざる繼續的な過程である。生活の前に立ち現れる障碍は、生活の變更、生活の新しい適應への刺戟であつて、夫故にこそ障碍が却つて進歩の機會となる。生活における實踐、行動、經驗等の名で呼ばれてゐるものこそ哲學や思想の母體であり、また經驗のみが障碍を絶えず打破しては、變更への新しい進歩を促進して未來への希望を與へるのである。經驗の變更の過程の一步、一步は、それによつて起る未來の變化がさうなるかといふことから條件づけられてゐる。その一步、一步は夫自身を完成させるためではなく、未來に影響あるものとして初めて深い意味をもつのである。即ち生活の哲學は原理から來たのではなく、生活經驗の中から、自己を進歩させるために生れたものだと言ふことをはつきり意識することが大切である。

そこで本論のテーマである「保育の第一歩」がどこまでも文字通りの意味でなければならぬと力説してゐる理由である。

## 二

前節で述べたやうな考へ方から、保育者ミ保育兒ミの交渉關係を考へて見よう。或は保育者の保育兒に對する態度ミ言つた方がもつと分りいゝかも知れない。保育者の多くは今でも古い哲學の考へ方ミ同じ誤謬を犯してゐるはしないかと思ふのである。師範型ミ同様に保母臭いといふ言葉で世間から評されてゐることその一つの現はれかと思ふのであるが、それが何に原因し、何處から來てゐるかを考へて見る必要がある。保育者ミ保育兒を比べるミ、なるほゞ保育者には多くの

經驗ミ學殖ミがある。そこには保育兒の習慣養成の基礎ミなるべき道德的規範もあれば、保育兒の知性發達の基礎ミなるべき知識の論理的體系もある。この道德的規範や知的體系は各々の保育者の間では夫々深淺、廣狹の差はあるにしても、さうした一般的な規範や體系を所有してゐるミが、保育者ミしての資格づけでもあるけれども、その規範や體系が恰かも政治において法律が個人に命令し、自然科学においては法則が個々の變化する諸事實を支配し、また哲學においては普遍的の原理が現象的な諸事象を制約するミ考へられてゐるのミ同じ意味で理解されてゐる場合が多い。そこから保育者が、保育兒に對する態度の中に、何時ミはなしに、命令的な、支配的な、制約的な意識が忍び込んで來る。此の態度が教師臭いものにする最大の原因のやうに私は思ふ。かうした態度は二重の意味で教育的ではない。第一に、人間の存在は常に經驗や知識以上のもので、經驗や知識を所有したからミて、それだけで人間の全存在ミ置き替へらるべきものではない。従つて保育者が假令幼い經驗の少ない、知性の未發達な保育兒に對してゞも命令的、支配的、制約的態度に出るミは教育的ではない。このミは然し既に多くの人々の氣付いてゐるミである。然しそれ以上に根本的なミは、法律や法則や原理は命令し、支配し、制約するものではなく、却つてそれらの一般的なものは個々の事象を説明するに役立つだけであるミいふミである。例へば前節で説明したやうに、原理——究極の一定不變の存在者ミして考へられてゐた——が哲學の對象であるミ考へるのは古い考へで、哲學の眞の對象は日常生活における個々の經驗であり、それを絶えず新しい思想系統へ構成していくのが哲學の仕事である。原理を對象ミ考へる限り、個々の諸事象は原理によつて支配され、原理に對して個々の諸事象は隨從するものミならざるを得ない。保育兒を支配するミは保育兒の隨從を強要する結果になる。そのミは教育者である限り誰しも自ら欲しないミではあるけれども、傳統的な考へ方の殘滓をまだまだ多分にもつてゐる者には、自ら欲するミ欲せざるミに拘はらず不知不識の間に自ら陥つてゐるのである。このミは保育者が自己を完

成した人間を見るこゝに聯關してゐる。保育されたもの（この場合は保育者のこゝ）であるが保育する行動に先行して、既に完成された獨立者であるといふ傳統的な考へがそこに固執されてゐるのを見通すこゝは出來ない。その際保育の對象は保育兒でもなく保育者自身におかれてゐるといふ奇現象を呈する。保育研究の眞の對象が保育者でないこゝは自明であるが、今日一般に考へられてゐるやうに保育兒でもないのである。保育研究の眞の對象は、その日その日の保育活動でなければならぬ。保育兒を保育者は保育活動においてこそ緊密なる交渉が生ずるのである。従つて保育研究は、保育活動の觀察的、實驗的記録の組織であつて、それは保育學を名づけられてよいであらう。保育活動の觀察的、實驗的記録の統一化が保育研究の對象に代るならば、保育活動はさきの經驗と理論との比較において説明したやうに、絶えざる進歩が促進され、保育事業は未來に希望をもつものとなる。保育實踐のみが未來の希望について語り、保育事業の發展を精確に豫見し得るのである。日々の保育經驗を離れて未來を豫見するこゝは空想に過ぎない。かゝる保育活動が保育研究の眞の對象とならなかつたため、保育の實驗的研究も活潑に行はれなかつたのではないかと思ふのである。經驗の活々した姿はそれが實驗的であるこゝである。古い經驗に新しい經驗を結合せんとする單なる知的の作用ではなく、實驗的經驗は與へられたものを變更せんとする絶えざる努力である。またそれは推理に満ち満ちてゐる計劃によつて未知の世界を發見せんことを要求する。課題から課題への絶えざる進歩は經驗が實驗的に與へられるとき一層顯著である。保育活動が實驗的でなければならぬこゝは幾度強調しても強調したりない。

### 三

保育活動が特に實驗的でなければならぬ理由を他の角度から要求しておきたい。幼兒及び一般に兒童の知覺が、吾々の想像以上に恐ろしく鋭敏であるこゝは誰もが氣付いてゐるこゝである。この鋭敏な知覺は幼兒の精力的な活動となつて

表現される。ところがその指導は依然現在の成人の鈍感さ、表現の不確實さに導く外ない取扱ひを受けてゐる。幼児の知覚は多様な發展の可能性をもつてゐながら、その搖籃のなかにおいて既に悲劇的な結果が將來に約束されてゐる。表現技巧の正確なる指導は幼児であれば一層のこゝ重要な保育課題である。唱歌、遊戯、談話、觀察、手技等における指導を見るに、現在のこゝろ未だ保育者のアマチュア的試み以上には出てゐないやうに思はれる。幼児の發育年齢に應じて指導する表現技巧の正確さには、夫々の段階において、幼児の心理發達からも亦技巧の難易から見ても一定の限度のあるこゝろは勿論自身認めてゐるのではあるけれども、一定の限度内での技巧表現の正確度は十分要求されなければならぬ。また一方からは知覚における表現技巧の正確さの要求は、知覚が特に兒童において驚くべき柔軟性、可塑性、暗示性をもつてゐるこゝろから案外吾々が現在考へてゐる程度以上に高められるかも知れない。それにかゝる柔軟性、可塑性、暗示性がその發達の最も可能性の多い時代に指導せられない場合、それらの特質が漸次遲滯されまたは喪失、硬化されるこゝろを吾々は恐れるのである。且つ幼児時代における正しい指導は、將來の發達の基礎であるばかりでなく、發達の可能な最大限度までの成長を達成し得ると思はれるので、これは保育研究上の極めて重要な中心的課題であると言ふのである。然し保育案構成上の材料だけでなく、保育者自身の技巧上の修練、幼児に要求される正確度の程度問題等の相關的研究の結果に俟つべきものが多いので、實驗的なる保育活動の共同研究によつて漸次にそれは解決さるべき問題である。實驗的保育經驗なしには、此の課題がいかに重要であつても、その成果を期待するこゝろは出來ないのである。

私はこゝろ最近私の深く感じてゐる二、三の問題を、可なり大膽に述べて來た。それだけに非常に大きい過誤を犯してゐるかも知れない。特に讀者の御叱正を乞ふ次第である。